しらうめようちえん

園だより

2023年度 第1号

白梅学園大学附属
白梅幼稚園
2023年４月10日発行
小平市小川町１－830

子どもの「できる」を考える

園長 本 山 方 子

ご入園、ご進級、おめでとうございます。

幼稚園で３年間を過ごすことを通して、子どもたちが「できる」ようになることが増えていくことでしょう。

実は、この「できる」には様々な種類があります。

一つには、毎日続けることで自然と「できる」ようになることがあります。家を出るまでの朝のルーティンや、幼稚園での身支度などがこれに当たります。いつの間にか「できて」いるので、いつしか当たり前になっていますが、子どもにとっては日々努力した結果ではあります。

二つには、偶然「できる」ことがあります。器に砂と水を入れてかき混ぜて、そこに草花や実を浮かべたら、ごちそうが「できて」いたりします。何となく始めたことでも、おいしそうに見えてくると初めからそのつもりであったかのように、「ごちそう、どうぞ」と人に勧めていることがあります。

三つには、「こうしたい」という目指す状態が明確にあって、やり方を教えてもらったり練習や努力をしたりして「できる」ようになることです。例えば、コマを上手に回している人を見ると、ああいうふうに自分もコマを回したいと憧れます。そして、ヒモの巻き方や引き方を観察したり練習したり、どうするのか尋ねたりして、やがて回すことが「できる」ようになります。

四つには、「こうしたい」という思いとイメージはあるものの、どうするのか決めているわけではなく、試行錯誤を通して「できる」ようになることがあります。例えば、子どもたちは、自分の手を触れずに、車両同士をガッシャンと連結させたいという思いがあって、試行錯誤して連結器をつくりだしたことがあります。その連結器のつくり方は誰かが教えてくれたわけではありません。自分たちで発明していったのです。

おとなは、子どもが何かを「できる」ようになると、自分も嬉しくなって、子どもをよく褒めます。褒められると、子どもは「これはいいことなのだ」「いいことをしたのだ」と自信をもちます。ですので、基本的に褒めることは子どもの自立には欠かせません。

但し、子どもが認めてほしいときに褒めることができているか、見極めることは容易いことではありません。子ども自身ができて当たり前と思っている時に褒めても、馬鹿にしているように受け取られることがあります。一方で、子どもが少ししんどいと思っているときに褒めれば、それは励ましになります。また、漠然と「よくできたね」と褒めると、子どもは不服そうな顔をすることがあります。それは、工夫や努力などのディテールを認めてほしいと思っているからかもしれません。

さらに、育ちとして目指したいのは、褒められなくても「できる」ことに子ども自身が満足することです。褒められることは「できる」ようになることの糧ではありますが、何も言われなくても見守られていることを、子どもが感じ取り、安心感をもてることが大切なのは言うまでもありません。様々な「できる」のうち、子どもはどのタイミングで何を誇りとしているのか、見逃さないおとなでありたいと願っています。